

之家アリ、

燧石京坂ハ淡青ノ石ヲ用ヒ、江戸ニテハ白石ヲ用フ、

〔毛吹草〕山城 燧石 摺火打 紀伊 燧 阿波 火打崎燧石 豊後 久多見燧

肥後 火打石

〔國花萬葉記〕山城諸職名匠

鍛冶所 火打明珍 伏見かいだう 火打久吉上同所 同吉守三條白川橋

金銀竹本土石

燧石 鞍馬山ふごおろし石 稻荷山ノ飴石

〔續〕江戸砂子一江府名産 井近在近國

刃金燧 所々にてひさぐ、まかれどもこれを根元と稱ス、 芝神明まへ升屋三郎兵衛

〔西遊雜記〕二新地城小倉ゆへにさしての舊跡なし産物略中 火打あり是も産物とし價金壹分

までの火打有り、火の出る事尤妙なり、

〔尺素往來〕蘇合圓略中 阿伽陀藥并臘藥等者、當世人々火燧袋之底面々小藥器之中、必齋持之、

〔古今要覽稿器財〕火打袋

火打袋は火うちを、入る、料なり、古事記に日本武尊東夷を征し給ふ時、倭比賣命より贈り給ひしぞはじめなる、

河内國交野郡渚村郷士某氏所傳燧袋圖弘賢藏○圖略

菅蒲草を以て造る、同草を以て底を入れ、前後縫めあり、深さ四寸八分、口廣五寸五分、腹のめぐり

一尺一寸、底の徑二寸、うらは朽損してなし、縫ひたる絲わづかに残りて見ゆ、

越後國農家所佩燧袋圖略○圖

燧袋